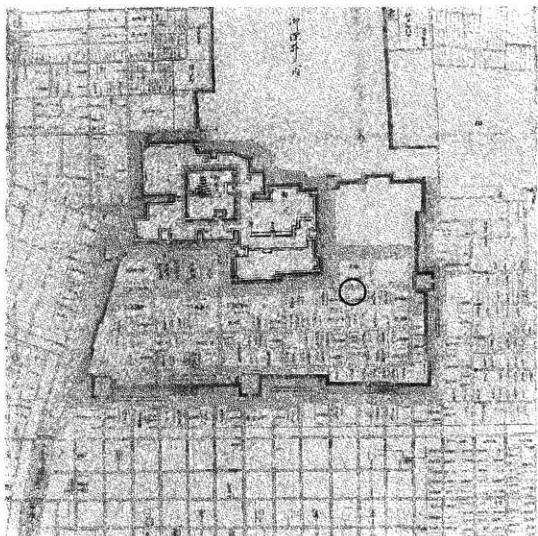


名古屋城三の丸遺跡

— 第10次発掘調査の概要 —



1999

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は、名古屋市中区三の丸三丁目1番地内における名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査は、名古屋市高速鉄道第2号線（地下鉄名城線）市役所駅出入口のエレベーター設置工事（名古屋市交通局）に伴うもので、約80㎡を対象とした。
- 3 発掘調査期間は、平成10年7月21日から平成10年7月30日までの間である。
- 4 調査は、名古屋市交通局の協力のもとに名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館藤部吾也、水野裕之が担当した。
- 5 出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 6 本書は、調査担当者の協力を得て、水野が執筆した。

目 次

I 遺跡の概要

II 調査の概要

- 1 調査の経過
- 2 遺構と遺物

III ま と め

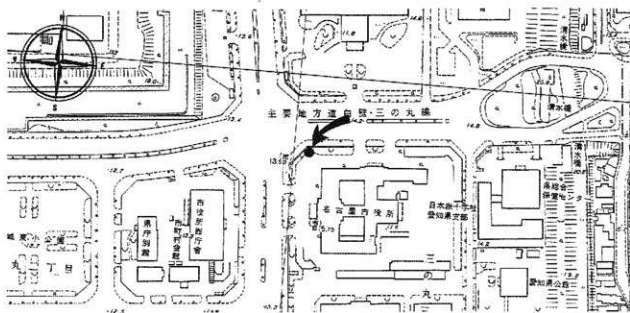
I 遺跡の概要

名古屋城は、慶長十五年（1610）に築城工事がはじまった。その「三之丸」の規模は東西約1.3 km、南北約0.8 kmである。当地は、熱田層という更新世の水成層からなる南北に長い台地の北端にあたり、標高は今回の調査地点付近では13.5 mほどである。この三の丸の範囲では、これまでの発掘調査によって、近世のみならず各時代の遺構や遺物が検出されている。遺物では、旧石器時代終末頃の細石核が明確なものでは最も古く、縄文時代早期と思われる七器片や詳細な時期が不明の石器が少量出土している。遺構の明らかなものでは、弥生時代中期～古墳時代の住居跡や周溝墓、古墳があり、古代にいたるまで遺跡範囲西側の台地西縁に近い部分に展開する。中世、戦国時代になると遺跡の東端部を除きほぼ全域に広がるようであり、戦国期の那古野城に関係すると考えられる溝や堀が顕著である。

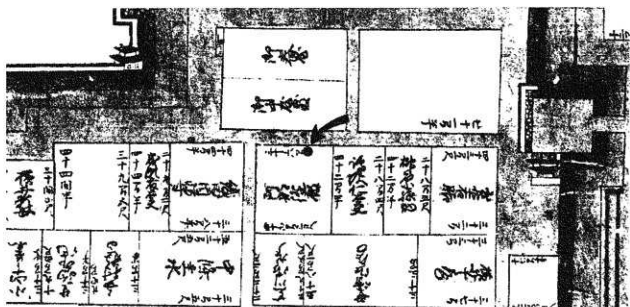


図1 名古屋城三の丸遺跡と調査位置（黒丸）

(1:25,000地形図 名古屋北部による)



(「名古屋都市計画基本図」1/2500を1/3750に修正)



(「江戸前名古屋図」享永6年(1705) 横写(徳左又庵複製)による)

図2 調査区位置図(矢印)

II 調査の概要

1 調査の経過

調査地は、名古屋市役所の敷地内にあたり、エレベーター設置工事部分の範囲には、すでに先行してH鋼が打設してあった。そのなかが発掘調査対象地である。調査面積が狭く、期間も短いことから表土除去から遺構検出、埋土掘削を並行して行なった。7月21日に調査を開始し、29日のクレーン車を使用した空中写真測量を経て、30日には現場作業を終了した。



写真1 発掘調査の状況

2 遺構と遺物

試掘調査の成果どおり、現地表から30～50cmの厚さで表土層（近代以降の土層および擾乱土）があり、その下は基本的にすく地盤層—地山（熱田層）であった。地山面は、残りの良い熱田層の最上層で通常みられる暗褐色を呈する部分を残しているところもあり過去に大きな地形の変化は受けていないと思われる。その地山面では、黒褐色土や灰褐色土の埋土からなる上坑や柱穴状の遺構がかなりの密度で検出され、戦国時代と江戸時代のもので占められるようであった。意外にも、近代以降の擾乱土などはほとんど無く、そのなかで調査区の西端で検出された戦国朝と思われる溝状遺構の肩部分がかつての地下鉄出入工事の際に失われていたことが残念であった。

出土遺物は、表1にも略記したが、江戸時代の上坑であるSK04、SK15からは、比較的多くの陶磁器類が検出されている。

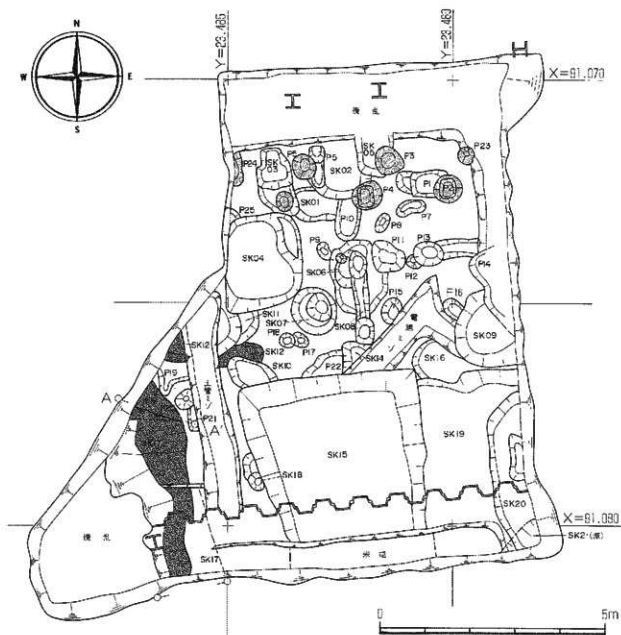


図3 調査区遺構平面図

表1 遺構一覧

遺構名	形状	規模 (原存部の最大値(m)) (長さ) / (幅) / (高さ)			埋土	出土遺物	時期	遺構の性格
SK01	楕円形	1.0	0.8	0.19	灰褐色土	ガラス瓶片	近代	鹿藁土坑か
02	不整形か	1.3	1.3	0.27	ブロック土混	軒丸瓦1	江戸前期か	"
03	凸字状	0.9	0.8	0.66	"	染付陶器皿1	近代	不明
04	不整形	2.1	1.7	0.61	灰褐色土	陶磁器片多数	江戸中期	鹿藁土坑
05	長方形か	1.0	0.85	0.73	ブロック土混	瓦片1	江戸時代か	不明
06	不整形円形	1.7	1.25	0.21	灰褐色土	なし	"	"
07	円形	1.1	1.0	0.36	"	"	"	"
08	溝内に小穴	2.1	0.35	0.34	ブロック土混	"	"	"
09	不整形円形	1.7	1.25	0.21	灰褐色土	瓦片1, 陶器片1	中世	"
10	楕円形か	0.9	0.8	0.2	暗褐色土	石口片?1, 土鍋片1, 須恵器片1	中世他	"
11	不整形円形か	1.0	1.0	0.35	ブロック土混	土師器皿片2, 天目茶碗片1	江戸前期か	"
12	長方形か	2.1	0.75	0.25	暗褐色土	天目茶碗片1, 鉄釉陶器片1	戦国時代	"
13	(減失)	—	—	—	灰褐色土	土鍋片1	不明	"
14	不明	0.7	0.6	0.18	茶褐色土	なし	"	"
15	方形	4.25	4.0	1.24	ブロック土混	陶磁器片, 瓦片多数	江戸後期	地下室か
16	不整形円形か	1.1	0.85	0.12	"	なし	不明	不明
14	溝状	4.4	1.2	1.2	暗褐色土	重圓皿片2, 碗片?1, 土鍋片1	戦国時代	溝
18	小穴	0.9	0.3	0.42	"	山茶碗片1	中世	不明
19	不整形か	4.1	2.2	0.57	灰褐色土	須恵器片1	江戸時代か	"
20	楕円形か	3.5	0.85	0.39	"	須恵器片1, 土師器片?1, 磁石1, 小耳1	江戸中期	鹿藁土坑か
21	不明	—	—	—	ブロック土混	なし	不明	不明
P1	長方形	0.85	0.6	0.13	灰褐色土	椀瓦片	江戸後期	鹿藁土坑か
2	方形(内側)	0.3	0.3	0.66	ブロック土混	なし	"	柱穴(溝)か
3	不整形円形	0.65	0.6	0.72	"	"	"	"
4	方形(内側)	0.7	0.6	0.75	灰褐色土	軒丸瓦1	"	"
5	不整形円形	0.55	0.5	0.47	ブロック土混	染付陶器皿片1	明治	"
6	(減失)				"			
7	楕円形	0.7	0.3	0.09	暗褐色土	なし	不明	不明
8	"	0.45	0.27	0.07	"	"	"	"
9	"	0.45	0.27	0.1	"	"	"	"
10	"	0.95	0.53	0.2	"	"	"	"
11	不整形	0.85	0.6	0.31	灰褐色土	"	"	"

P 12	円形	0.3	0.27	0.17	灰褐色土	なし	不	明	不	明
13	"	0.67	0.55	0.66	"	"	"	"	"	"
14	下整形	1.7	0.7	1.03	ブロック土泥	"	"	土	坑	
15	楕円形	0.6	0.3	0.1	灰褐色土	"	"	不	明	
16	"	0.45	0.35	0.11	暗褐色土	"	"	"	"	
17	"	0.4	0.3	0.07	ブロック土泥	"	"	"	"	
18	円形	0.35	0.3	0.06	"	"	"	"	"	
19	不整形	0.7	0.8	0.06	"	"	"	"	"	
20	楕円形	0.5	0.4	—	"	"	"	"	"	
21	方形か	0.6	0.2	0.09	灰褐色土	"	"	"	"	
22	不整形か	0.9	0.55	0.1	暗褐色土	"	"	土	坑	か
23	円形	0.4	0.35	0.35	ブロック土泥	"	"	"	柱穴(跡)か	
24	楕円形か	0.7	0.2	—	"	"	"	"	"	
25	円形か	0.3	0.3	0.18	"	"	"	不	明	

(1) 戦国時代の主な遺構

● SK17

調査区の西端で検出した当初に土坑と認識したこの遺構は、南北方向（ほぼ真北方向）に延びる溝状遺構の一部であると思われる。断面形は、約50度の傾斜でV字状をなすと思われるが、底部および西側肩部が確認できず形状、規模ともに不明確である。出土遺物や黒味の強い埋土の特徴から戦国時代の遺構であり、この付近に存在が推定される那古野城に関わってつくられた溝（堀）の一部かと思われる。なお、これまでの名古屋城二の丸遺跡で検出された該期の遺構のなかでは、明確なものとしては当遺構が最も東側に位置するものである。



写真2 SK17

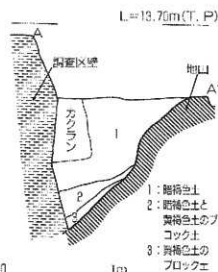


図4 SK17埋土断面

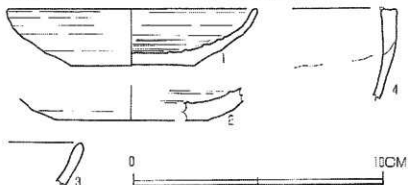


図5 SK17出土遺物（1、2重圓皿、3鉄鉢、4土師器類）

(2) 江戸時代の主な遺構

●SK04

出土遺物には、瀬戸・美濃陶器の碗類、
漆鉢、肥前染付磁器碗、同色絵磁器小皿、
同京焼風陶器碗（高台内側に「小松吉」
印銘）などのほか、土師皿、瓦片がある。
時期は、17世紀末～18世紀前半頃か。

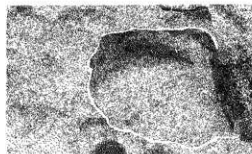


写真3 SK04

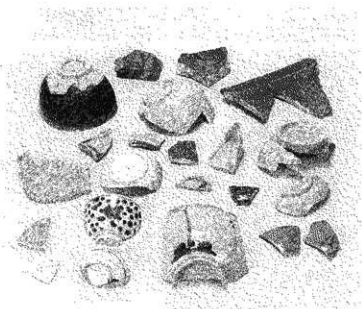


写真4 SK04出土遺物

●SK15

平面形が台形状を呈する大型の上坑で、
地下室（穴蔵）と思われる。遺物は比較
的少なく、しかも小破片がほとんどで
ある。陶磁器の碗類のほか、瀬戸・美濃陶
器土瓶、同植木鉢、常滑製瓦、軒棧瓦、
銅製煙管（吸口片）などが出土している。
時期は、19世紀中頃か。



写真5 SK15

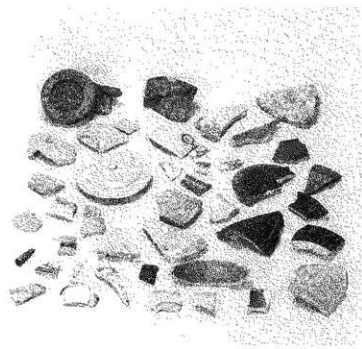


写真6 SK15出土遺物

●柱穴列

一間間隔で東西方向の柱穴列（P2、P4ほか）と、そこ
から北側に約半間離れたやはり一間間隔の柱穴列（P23、P3、
P5）が調査区北端部で検出された。このふたつの時期差の有
無等は不明であるが、P4からは、18世紀後半以降と考えら
れる軒棧瓦片が出土している。



写真7 柱穴列

III まとめ

今回の調査では、戦国時代と江戸時代の遺構、遺物の資料を得ることができた。

戦国時代には、今川氏親によって築かれたとされる那古野城に関係すると思われる溝の一部が検出された。これまで近世名古屋城三の丸内の遺跡範囲では、東側半分での開発による発掘調査が少なく、該期の遺構の存在が不明確であった。当調査区は、極めて狭い範囲ではあったが、ほぼ南北方向に区画された遺構が検出されたことで、これまでの三の丸西半での該期の遺構群より東側にも、那古野城の規模や性格に関連する遺構が広がっていると考えたほうがよさそうである。

江戸時代の遺構については、現地表からわずかに、地盤層である熱田層が検出され、これを掘り込んだ遺構については、良好な状態で残存していた。城下絵図等を見ると調査地点は、「東大手門」から西へまっすぐに伸びる「天王筋」の南側に面した角地の「阿部」氏の屋敷地の一部にあたると思われる。調査区北端部で検出された東西方向の柱穴列は、さらに北側が未確認の状況ではあるが、建物跡と考えるほかに、「天王筋」に面した屋敷地北辺部付近に構築された塀や櫓の痕跡とも考えられる。

報告書抄録

ふりがな		なごやじょうさんのまるいせき だいじゅうじゅうはくつちようさかいようほうこくしよ					
書名	名古屋城三の丸遺跡 第10次発掘調査概要報告書						
編集者名	水野裕之						
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館						
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市中区見晴町47 TEL.052-823-3260 FAX.052-823-3223						
発行年月日	西暦 1999年3月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村:道庁番号	北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
名古屋城 三の丸遺 跡	愛知県名古屋市 中区三の丸三丁 目1番地地内	23100 7 27	35度 10分 32秒	136度 54分 32秒	98.7.21 { 7.30	約80	地下鉄駅出入 口エレベーター設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名古屋城三の丸 遺跡	城館址	中世~近世	土坑、柱穴、溝	中世陶器、近世陶磁器			

名古屋城三の丸遺跡
—第10次発掘調査の概要—
1999年3月30日

編集 名古屋市見晴台考古資料館
発行 名古屋市教育委員会
印刷 株式会社 クイックス

表紙写真、
¹鳳形名古屋城、寛永6年(1709)撰写
鎌倉文庫所蔵古地図複製NO.1による